

「底が突き抜けた」時代の歩き方 586

孤独な宇宙に独りぼっちで放置された犬に思いを馳せよー動物の受難

インターネット「MSN エンカルタ 百科事典 ダイジェスト」によれば、《宇宙をとぶ神話、夢、小説や科学技術の長い歴史は、1957年10月4日、旧ソ連による最初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げで頂点に達した。この人工衛星につけられたロシア語名は「世界の旅行仲間」を意味するスプートニク・ゼミリで、その名のおり太陽の周りをまわる地球の仲間となった。》

《スプートニク1号は直径58cm、重さ83kgのアルミニウム製の球形で、地球の周りを96.2分で1周した。この人工衛星は楕円軌道を取り、遠地点は946km、近地点は227kmである。また、この球の中につみこまれた装置は、21日間、宇宙線、流星体、上層大気の密度と温度についてのデータを送信してきた。57日目にスプートニク1号は地球大気に再突入し、空力熱のためにもえてしまった。》

スプートニク2号は、その一ヵ月後の《1957年11月3日にライカ犬をのせてうちあげられ、宇宙医学に重要な情報をおくってきた。スプートニク2号は打ち上げから162日後に地球の大気に再突入し、破壊された。》世界最初の人工衛星を打ち上げたソ連に対して、アメリカも負けていなかった。《スプートニク2号がまだ軌道上にあった1958年1月31日、フロリダ州ケープカナベラル（1963～73年はケープ・ケネディとよばれた）からアメリカ初の人工衛星エクスポローラ1号がうちあげられた。重さ14kg、直径15cm、長さ203cmの円筒形の人工衛星は112日間、宇宙線と微小隕石の測定結果を送信してきたが、その中にはバン・アレン帯の発見へとつながるデータもふくまれていた。》一ヵ月半後の3月17日、アメリカ第二の人工衛星バンガード2号が打ち上げられ、《その軌道がどのように変化したかを正確にしらべることにより、地球がわずかに洋ナシの形をしていることがわかった。この衛星は太陽エネルギーをつかって6年以上も信号をおくりつづけた。》

9日後の3月26日にエクスポローラ3号、5月15日にスプートニク3号が打ち上げられ、1327kgの后者は、《60年4月に軌道が低下するまで太陽放射、宇宙線、磁場などを測定しつづけた》。宇宙に飛ぶ人類の計画が、やがて地球に最も近い月に向かうことになるのは必然であった。月の科学的探査は59年9月12日に打ち上げられたソ連のルナ2号が、《36時間後に月に衝突した》ときに始まった。59年10月4日打ち上げのルナ3号が月面裏側の最初の写真を撮影し、64年7月28日打ち上げのアメリカのレインジャー7号が、《月に衝突する直前に高度が約1800kmから約300kmにさがるまで、月面のテレビ画像を4306枚送信してきた。地球にいるわたした

ちにはじめての月のクローズアップ写真を提供した》。

無人月探査のその後は、66年1月31日、ソ連のルナ9号が初めて月面軟着陸（破壊を伴わない着陸）に成功し、5月30日、つづいて軟着陸に成功したアメリカのサーベイヤー1号が、《1万1237枚の月のクローズアップ写真を地球におくってきた》。67年にはサーベイヤー3号が《月の土壌のサンプルを採取し、テレビカメラでそれらをしらべた。サーベイヤー5号はアルファ粒子散乱法をつかって月面を化学的に分析した。これは地球外の天体をその場で分析したはじめてのケースである。》これらの無人月飛行による成果が有人月飛行に結実したのが、1969年7月20日のアメリカのアポロ11号月面着陸であった。月着陸船イーグルから人類史上初めて月面に降り立ったアームストロング船長は、月の地平線から宇宙の闇の彼方に青白く光る地球の映像を送信してきたのである。この「1969年」という年が、地球上では「大学闘争」が噴出し、チェコ、中国等の共産圏で体制が激しく揺れた年であったことに注目すべきであろう。「巨大なパチンコ玉のような球体」であったスプートニク1号と異なって、ライカ犬を乗せて打ち上げられたスプートニク2号は1号の6倍もの508kgの重量に一気に跳ね上がった。このライカ犬は「初めて宇宙に飛んだ犬」として、ソ連では「労働英雄」として賞賛されたが、もちろん、地球に生還することなく宇宙に飛ばされた当のライカ犬にとっては、なにもわからないまま搭乗席に縛りつけられて、死に突入させられていった悲劇であり、災難以外のなにもものでもなかった。人類の宇宙開発という計画のために、想像を絶する宇宙規模の孤独と不安のなかに放置されて死んでいった、この見知らぬ「犬」のことをけっして忘れないためにも、この「犬」について知りうるかぎりのことをここに書き留めておきたい。

「クドリャフカ」と名づけられたこのライカ犬は雌で、多くの訓練された犬の中からただ一匹、選抜された。ライカ犬とはシベリアンハスキーのことであり、ソ連がこの犬を選ぶとき、ロシア原産の犬であること、（世界の新聞に写真が載ることを考えて）見栄えのする可愛らしい犬であること、の二点を念頭に置いたとも言われている。スプートニク2号には彼女の様子を克明に伝える計器類が満載されていたために、彼女は全く身動きできないまま、スプートニク2号が地球の周りをまわりつづける5日間、天涯孤独の彼女もまた共にまわりつづけた。そして6日目、大気圏再突入の前に彼女に毒入りの餌を食べるといふ最後の仕事が訪れ、これまでの食事と同様に、口につながれたチューブから大量の睡眠薬の入った食事が喉の奥に流し込まれた。彼女の死後、スプートニク2号は地球の周りをまわりつづけ、打ち上げから162日目に大気圏で燃え尽きた。

いうまでもなくクドリャフカの宇宙飛行は初の有人宇宙飛行をめざすソ連の宇宙開発計画の一環にはかならなかったが、三年後の60年8月には2匹の犬を乗せたスプートニク5号が打ち上げられ、回収にも成功した。翌年の61年4月12日には同じソ連のガガーリン少佐が人類初の宇宙飛行を果たし、69年7月のアメリカのアポロ11号の月面着陸→アームストロング船長の月面着地へとつづく。フリー百科事典『ウィキペデ

『[Wikipedia](#)』は、次の情報を伝えている。スプートニク 2 号のクドリャフカは最初の「宇宙犬」とみなされているが、それ以前にもソ連およびアメリカは動物を乗せた宇宙船を打ち上げていた。しかしそれらの宇宙船はすべて、衛星軌道までは届いておらず、クドリャフカが《地球の軌道上を回った最初の生き物となった》のである。ライカ（クドリャフカ）の死については、こう記述されている。

《スプートニク 2 号は回収可能なようには設計されていなかったもので、1958年5月14日、大気圏再突入の際に壊れた（最近の資料では4月4日とされている）。当初の計画では、ライカは再突入の前に食物に毒を入れて安楽死させられる事になっていたが、1999年、ライカはキャビンが過熱した4日後に死んだと複数のロシア筋が伝えた。》
《さらに2002年10月、ライカは打ち上げ数時間後に過熱とストレスにより死んでいたとロシア筋は公表した。ライカに取り付けられたセンサーは、彼女の脈拍数が打ち上げ時に、安静時の3倍にまで上昇したことを示した。無重力状態になった後に脈拍数は減少したが、それに先立つ地上実験時の3倍の時間を要した。ストレスを受けている兆候である。飛行開始のおよそ5-7時間後以降、ライカが活着している気配は送られてこなくなった。》

《ライカは、モスクワの通りで迷子になっているところを見出された犬で、その名前「ライカ」はロシア語で「吠え屋」という意味、サモエド系の雑種で、その後に打ち上げられたソ連の宇宙犬たちと同じく、雌犬だった。ライカ犬（犬種、ロシアン・ライカ）であったとする資料もあり、報道の過程で名前が犬種と間違えて伝えられたと思われるが、逆に犬種が名前と混同された可能性もある。

クドリャフカ Kudryavka（巻き毛ちゃん）またはクドリャフスカの名でも知られるが（後者はおそらくクドリャフカの誤記）、NASAの国立宇宙科学データセンターのサイトでは、はじめクドリャフカと呼ばれ、後にライカと改名されたとしており、おそらくこれが最も合理的な説明である。（以下略）

《スプートニク 2 号のために訓練された犬は3匹いた。アルビナ（Albina）、ライカ、およびムシカ（Mushka）である。アルビナはテスト・ロケットで2回高い高度を飛行したが、ムシカは計器と生命維持装置のテストに使われた。スプートニク 2 号の狭いキャビンに適応させるため、犬達は20日間かけて徐々に小さな檻に移されていったという。》

《ライカ以降、ソ連は通算13頭の犬をロケットに載せて打ち上げているが、これは1961年の人類初の有人宇宙飛行（ユーリ・ガガーリンによる）に備えたものであった。犬達は与圧服を着せられており、その多くは地上に生還している。はじめて生還に成功した2頭の犬、Strelka と Belka は特に有名で、Strelka の子犬の1頭は、ジョン・F・ケネディ米大統領に贈られた。》

85年のスウェーデン映画『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』（ラッセ・ハルストレム監督）の主人公の12歳の少年は、自分が孤独に陥るたびにこの人工衛星に乗せられ

死んだ犬に思いを馳せる日々を描いていたが、その画面は何度もひとりぼっちの宇宙で「うお～ん、うお～ん」という犬の咆吼ほうこうが聞こえてきそうな気配に満ちていた。この「うお～ん、うお～ん」という犬の悲しげな咆吼がスクリーンを超えて、我々の耳にこびりついて離れなくなるなかで、我々は遠く離れた宇宙ではなく、この地球の自分たちが暮らす足下でも共通する同じ出来事がつい最近あったのを想起しないだろうか。十数年前の兵庫県南部を襲った大地震で倒壊した家屋のなかで置き去りにされたペットたちが、その異様な事態を飲み込めずに右往左往していたのを目撃しなかっただろうか。「うお～ん、うお～ん」という犬の遠吠えを耳にしなかっただろうか。

もちろん、人間の都合で人工衛星に乗せられ死んでいった犬と、自然災害の地震に遭遇したペットたちとを同列に置くことはできないかもしれない。後者の地震では人間も同じ目に遭うことになったからだ。しかしながら、地震という自然災害においても「人間の都合」が見え隠れしていたことは打ち消せない。人工衛星の犬も地震に襲われたペットも、自分たちがなぜこんな目に遭わなくてはならないのか、が全くわかっていない点で共通していた。更に彼らにとっておぞましかったのは、人工衛星の犬であれば、たった一匹の死出の旅（そのことすらわかっていなかった）であって、同行者は誰もいなかったことであり、同様に倒壊した家屋のなかで放置されたペットもまた、事情が飲み込めないなかで共に生活してきた人間から見捨てられたことであった。動物としての本能のままに行動することも封じられ、人間と一緒に避難することもできない、気が狂いそうになる孤独のなかに彼らは放置されつづけていたのだ。

人間にとってひとりぼっちが嫌なら、動物だってひとりぼっちが嫌である筈だ。人工衛星の犬は毒を飲まされて死んだのではなく、発狂して死んでいったと想像する。耐えられる極限を越えていたにちがいない。人間と異なって動物は鈍感だから、なにをされても大丈夫だということにはけっしてならない。人間であれ、動物であれ、同じ生き物としての耐えられる臨界域はそう変わらないだろう。ただ決定的な違いは、事態が飲み込めるか、飲み込めないかであって、人間はその分だけ、動物と比較して耐えられやすいかもしれない。地震などの自然災害と異なって人為的な戦争などにおいては、人間は事前に予測して対処することができるけれども、いきなりその影響を多大かつ一方的に被る動物たちの場合は非常に苛酷であり、最大の戦争の犠牲者といっても過言ではない。動物たちが戦争の最大の受難者であった例は、戦時中の日本全国の動物園でみられた。95. 7. 4付朝日に「戦時中、動物の悲劇全国で」の大見出しで、次の記事が記載されている。

《空襲が激しくなった1943年夏から44年にかけて、日本国内の少なくとも9つの動物園で120頭を超える動物が薬殺、射殺などの手段で処分されていたことが、京都市動物園（同市左京区）の飼育係長、小島一介さん（52）の調査でわかった。東京・上野動物園で「トンキー」ら3頭の象が殺された話は絵本や国語の教科書で知られているが、同じような悲劇は全国の動物園で繰り返されていた。「戦後50年を前に、国家

規模で動物たちが殺されていった実態を浮き彫りにしたかった」という。

小島さんは、動物園に残る業務日誌や記念誌から約半年かけて猛獣処分の軌跡をたどった。戦争中、国内にあった約20の動物園のうち、東京の上野、井の頭や仙台、名古屋、京都、大阪、神戸、北九州、熊本の各動物園に処分記録が残っていた。宝塚動物園（兵庫県宝塚市）のように処分の計画書はあるのに、記録が無くなっている園もあり、「120頭余り」というのは、処分を文書などで確認できた数字だ。

上野動物園では、ゾウだけでなくヒグマやマレーグマも殺された。日本軍が占領した満州やマレー半島から戦利品として送られてきたものだったが、「時局捨て身動物」と呼ばれた。

「猛獣が逃げる危険も確かにあった。しかし、敵への憎しみをかきたてようという政府の意図も否定できない」と小島さんは言う。

京都市動物園の職員が残した44年3月12日の日誌に「其筋ヨリノ通牒（つうちょう）モアリ、本園飼育猛獣ノ処分ヲナス事トナリ」とある。翌日から約二週間で、クマ5頭、ライオン4頭、トラ2頭、ヒョウ3頭が銃殺された。

「銃の扱いに不慣れな飼育係に撃たれたアカグマのニコーは、翌日になっても生きていたため、泣きながら針金で首を絞めて殺した」。飼育係の間に語り伝えられている話だ。

飼料や暖房燃料不足で病死した動物も少なくなかった。開戦後に「皇国」と改名されたキリンの「ワンジロー」や、大東亜共栄圏構想にちなんで「共栄（ともえ）」と改名されていたインドゾウの「カリヤニー」も病死した。

開戦前に京都市動物園にいた209種965点の動物は、敗戦後の45年9月には72種274点に減っていた。

43年夏、大阪市長は天王寺動物園の寺内信三園長に猛獣の極秘処分を命じた。44年3月までに、ライオンやトラ、ヒョウなど26頭が毒殺された。「決断を迫られた寺内園長は体重が5キロ減った」と70年誌にある。

北九州市にある到津遊園動物園では一部でも生き延びさせようと、トラは四国の高松動物園へ、ゾウはサーカスへそれぞれ疎開させようとした。しかし、すべて移動中や疎開先に移ってまもなく死んだ。

水前寺動物園（熊本市）にも43年8月末、「猛獣は即刻処分」との軍命令が伝えられた。園内に養兎（ようと）場を作り、えさを一日おきにして飼料を自給しようとしていた矢先のことだ。電線を仕込んだ竹に肉をまき、その日のうちにライオンなど15頭が処分された。

ゾウのエリーは、園内に駐留していた軍関係者が、「肉を部隊の食糧とする」と通告してきた。飼育係の金沢太郎さん（故人）がプールに電流を流したが、エリーは入ろうとしない。やむなく電極を口に差し込んで感電死させた。

長男の敏雄さん（58）は、解体されたエリーの血でゾウ舎裏の側溝が真っ赤に染まったのを鮮明に覚えている。「父は5年後に交通局に異動になると、二度と動物園を訪

れようとしなかったし、話題にすることも避けていました。」

調査にあたった小島さんは「軍の命令に抵抗して動物を守る自信は、私にもない。たとえ疎開させても、餓死や病死が待っている。となれば、そんな危機を招かないように努力するしかない」と言う。》

日本では戦後60数年を経過したが、世界はいまだに戦争を行っている。したがって、戦争当事国では動物たちの受難が途切れることはないだろう。99.5.21付毎日の記事は、「空爆で精神に異常」をきたした動物たちの悲惨さを報告している。

《【ベオグラード20日福原直樹】北大西洋条約機構(NATO)軍の空爆にさらされるベオグラード中央動物園で、母トラや母オオカミが、生まれたばかりのわが子を殺す事態が頻発している。自分の足をかみ、血だらけになる動物もいる。空爆翌日に多発していることから、動物園は「動物が精神に異常をきたしている」と懸念している。

ブック・ボヨビッチ園長(58)によると、「子殺し」が始まったのは4月中旬にベオグラード空爆が激化してから。動物園は市中心に近く、軍司令部や内務省への爆撃が続いた5月中旬までの間に、トラの「チツア」が子ども3匹をかみ殺したほか、母オオカミが生まれた6匹のうち5匹を殺した。さらにミミズクも子育てを放棄したり、かみ殺すなどして、ヒナ5羽が死んだ。流産も相次ぎ、シマウマ、コブウシ、ライオンなどが、それぞれ1~4回経験したほか、ライオンが自分の足をかみ続け、血だらけになっているのも確認された。

ボヨビッチ園長は「動物はどこに逃げることもできない。彼らに罪はない」と、NATOに手紙を書き、空爆の即時中止を訴えている。》

有人宇宙飛行への途を切り拓くために犬を人工衛星に乗せて死なせていくのも、戦時中の動物園で食糧危機や猛獣の逃亡による危険さなどの理由から、動物を薬殺、射殺するのもすべて、動物が人間の下位に位置づけられているからである。一言でいえば、動物は人間に役立てられるために存在していると考えられてきた。「人を殺してはなぜいけないのか」という問いが発されることはあっても、「動物を殺してはなぜいけないのか」という問いが一度も発されることのないのは、人間の肉食や新薬の開発などのために動物が犠牲になってもやむをえない、と大半の人々に思い込まれてきたからだ。いや、そう思い込まれてきただけではない。その思い込みが当然視されるような社会~経済制度がかたちづくられてきたし、人間の社会や生活そのものが動物たちの犠牲抜きには成り立たないような仕組みになってしまっているのだ。

動物ははたして、人間のために存在しているのだろうか。人間がそれ自体として存在しているように、動物もまたそれ自体として存在しているのではないだろうか。動物は人間に役立てられるために存在していると考えた人々は、どうして人間は動物に役立てられるために存在していると考えたりしないのだろうか。それは前述したように、動物は人間より劣っており、劣っている動物が優れた人間を支えるのは当然という発想に貫かれているからだ。もちろん、この発想は動物と人間の関係にのみ限定されて適用される

わけではない。優等一劣等の対比的な発想は人間社会にスライドされて、優れた人間と劣った人間の分別へと向かい、劣った人間は優れた人間に役立てられるために存在し、支えていくのは当然というようになっていく。人間社会のなかにも動物に対する侮蔑的なまなざしが繰り返されていくようになるのだ。したがって、動物について考えることは、人間自身について考えることに等しい。

16年前の9月17日付朝日には、「なぜ動物実験に反対か」、その理由について「動物実験の廃止を求める会」事務局長の野上ふさ子が次のように列挙している。

「生物が他の生物を食べて、生命を維持していくのは、やむを得ないことですが、節度なく、無制限に他の生命を奪って良いわけはありません。単なる研究者の功名争いや、企業の利益競争のために、動物を犠牲にすべきではありません」

「日本では年間約2千万の動物が実験に使われていると推定されます。医学や科学の進歩のためといわれますが、動物実験のほとんどは、実験のための実験ともいうべき、無意味かつ残酷なものが多過ぎる気がします。例えば、医学生がみな外科医になるわけでもないのに、なぜ生きている動物の解剖実験をやる必要があるのでしょうか。また交通事故の実験だといって、イスに固定したサルの額や後頭部にハンマー状の装置を何十回もぶつけて殺しています。事故自体を減らす努力を怠り、サルを殴殺するのは、人間の横暴です」

「まして人間が生きていくのに必要とは思えない化粧品などの開発で、動物を犠牲にするのは論外です」

「ただ動物実験をして新たに開発した化粧品は使わないでほしい。他の生命を犠牲にしたうえに作られる美は、本当の美といえるのでしょうか」

「例えば、ウサギを使うドレーズテスト。ウサギは涙腺（せん）が発達していないため、異物を目に入れても、涙で洗い流すことができません。この特性を利用、化粧品などの原料や製品を毎日注入し、ウサギの眼粘膜がただれ腐っていく過程をデータにとる実験をしています。あまりにも残酷と、反対運動が起こり、欧米では大手化粧品メーカーが次々に動物実験を中止しました。しかし日本では、今も年間推定30万匹が犠牲になっています」

「その他、安全性試験の名のもとに、動物たちを身代わりにして、さまざまな毒性試験が行われています。化粧品なら実験動物の毛並みが良くなったり、より元気になっても良さそうですが、実験は皮膚などに炎症を起こし、衰弱し、死んでしまいます。これは本来化粧品は有害なもので、実験もどの程度まで薄めれば、人間に対する中毒症状を抑えられるか、という数値を求めるためのものであることを示しているのではないのでしょうか」

「体に良いものなら、20年、30年と同じものを売り続ければいいのです。ところが、手を替え品を替え、次々に新製品を出す。薬づけが問題になっている製薬会社も同様ですが、新製品を出すたびに動物たちが犠牲になる」

「単なる動物愛護ではなく、私自身を含めた人間のエゴイズムに対する反省から動物実験に反対しているのです。例えば、最近化粧品メーカーは、紫外線防止の化粧品を一斉に売り出しました。オゾン層を損なうまで地球を汚したのは人間なのに、被害者である動物を踏み台にして、自分たちだけが、その害から身を守ろうとしています」

「6月末には、路上放置のトラックのなかで、子犬14匹と子猫2匹が、暑さによる脱水症状で死にました。持ち主は新宿西口でペットを売っている露天商で、酒を飲んで寝込み、エサや水を与えなかったと報じられています。私たちは以前から、動物の保護及び管理に関する法律違反の疑いがあると抗議していたのですが、この法律には虐待の定義がないため、とりあげられませんでした」

「保健所や動物管理事務所には、年間80万の犬や猫が持ち込まれます。大部分はすぐ殺されますが、健康で人になついているペットは、実験用に払い下げられ、苦しみながら死んでいきます。人間を信頼していればいるほど、最後になって裏切られるのです」

「欧米諸国では、ペットの実験は禁止されています。東京都も最近、犬猫の払い下げ中止の方針を決めました。これは都内の病院で、実験後衰弱したまま治療も受けられずに苦しんでいる犬を見つけ、私たちが都に申し入れたからです」

「まず動物を使わない代替法の開発研究が急務。欧米ではウサギのドレーズテストの代替法も開発され、全廃に向かいました」

「次に動物実験の情報公開。研究者は、成果があがったときだけ論文で公表しますが、失敗すると闇（やみ）から闇へ葬ります。しかもその数の方が圧倒的に多い。情報不足のため、同じような実験が、あちこちで繰り返され、多くの動物たちが無駄に命を落としています。すべての実験を公開制度にして、結果をデータベースにでも登録するようになれば、実験数は激減するはずです」

「欧米先進国の法律では、動物実験に際し、事前に国や自治体、動物福祉団体などで構成する倫理委員会の許可を得ることになっています。日本でも数年前に大学や研究機関に委員会ができましたが、メンバーは内部関係者にほぼ限られていました。厚生省を中心に、『実験動物福祉委員会』の設置が、検討されていますが、動物福祉を考える人たちを、数多く委員に加え、審議を公開すべきです」

「研究者は、足元を見つめ直す時期にきていると思います。現代の研究開発の姿勢は、他人の痛みや苦しみに無感覚な人間を育て、ひいては環境破壊を生み出す原因になっています。動物実験に反対するということは、行き過ぎた人間中心主義を反省し、いまの社会に失われつつある『いたわり』とか『思いやり』を取り戻すための運動でもあるのです」

このインタビューは16年前のものであるから、現在にそぐわないところがあるかもしれないし、動物実験などに関しても多くの抗議の声に考慮して、変わってきているかもしれない。しかしながら、動物実験や動物虐待のありかたは変わりつつも、それでも根幹は変わらず、動物の受難は打ち続けているにちがいない。前日の9月17日、6月朝

日にマーケティング・コンサルタントの伊藤桂子という人が、『『かわいさ』症候群』と題したコラムで、出生率が低下するなかで、赤ちゃんがかわいいと思えない女性が増えていることを指摘して、《ぬいぐるみや動物の赤ちゃんは、見た途端、胸キュンのかわいさを感じるのだが、なぜか、人間の赤ちゃんにはそう感じない》と観察する。《少女たちの部屋には、ぬいぐるみが「お友だち」として鎮座》し、《OLの間では、「猫を飼ったらかわいくて、結婚しなくなるわヨ」などとひそかにささやかれている。》

なにしろ16年前のコラムだから、現在にそぐわない点があるとしても、この『『かわいさ』症候群』は当時以上にますます拍車が掛かってきているのは間違いない。《人間より動物の方がかわいい》のは、人間よりも動物の方が自分の思いどおりになるからであり、赤ちゃんは夜泣きするし、人間は裏切ったりするから、《だんだん人と付き合うのがうっとうしくな》っていく。動物をかわいと感じるのは、一見動物虐待や残酷な動物実験と対極的な立場にあり、動物愛護に重なってみえるかもしれないが、けっしてそうではなく、むしろそのようなかたちをとった動物虐待とみなすべきだろう。そこには動物愛護ではなく、自分に逆らわないものを手なずけようとする自己愛護しか感じられない。かわいがっていた動物が手に負えなくなったら、すぐに捨ててしまうというのが、この『『かわいさ』症候群』の本質である。つまり、かわいいと思う動物は自分の手元に置いておくけれども、かわいくないと思う動物に対しては全く無関心で、排除丸出しなのだ。

かわいがられる動物がますますペットとして愛玩されていく傾向と、動物をペット化する人々の視野に入ってこないところで、多くの動物たちが残酷な目にますます遭っていく傾向とは軌を一にしている。犬のペットがブランドものに集中していく裏で、かつては通常の飼い犬であった雑種犬が淘汰されてしまったかのように、姿を見せなくなっていく惨劇が進行しているのだ。おそらくブランド犬をペットにしたがる心理には、そのブランド犬の飼い主である自分自身がブランドに成り上がりたい根性が隠されているようにみえる。『『かわいさ』症候群』とは「かわいなさ」徹底排除症候群の別名でもあるかもしれない。

「なぜ動物実験に反対か」のインタビュー記事については、「生物が他の生物を食べて、生命を維持していくのは、やむを得ないことですが、節度なく、無制限に他の生命を奪って良いわけはありません。単なる研究者の功名争いや、企業の利益競争のために、動物を犠牲にすべきではありません」という最初の個所に、すべての問題が集中しているだろう。「生物が他の生物を食べて、生命を維持していくのは、やむを得ないことであるのは、食物連鎖の生態系のなかにあらゆる生物が置かれており、その自然の摂理を免れることはできないからだ。しかしながら、人間が「節度なく、無制限に他の生命を奪」うのは、資本主義社会体制の問題にほかならない。「単なる研究者の功名争いや、企業の利益競争のために、動物を犠牲にす」るのは、資本主義社会の必然にほかならないのである。動物を犠牲にしてまで研究者が功名争いを繰り返すのも、企業が利益

競争に邁進するのも、資本主義社会体制の自然な振る舞いにすぎない。

もちろん、動物を犠牲になどしなくてもいいようなかたちで研究者が研究に勤しめないわけではないし、企業も利益を獲得できないわけではないだろう。だが資本主義社会体制では、企業があらゆる手段を尽くして利益を獲得するのは善とみなされているし、また善とみなさなければ、資本主義社会体制そのものが存続しえないのである。したがって、資本主義社会体制では動物はおろか、人間さえ犠牲にするところまで突き進んでいく。なにしろ企業の最大の目的は利益を獲得する点にあるからだ。仮に動物実験を行ってまで新薬開発をするな、と大手製薬会社に圧力をかけて、動物実験を阻止したとしても、製薬会社は会社の存続を賭けて動物実験の代替に全力を尽くすだろう。映画『ナイロビの蜂』では、新薬開発のために、病気を無料（あるいはわずかなお金を施して）で直すという救済事業の一環と称して、貧しいアフリカ原住民を実験対象にする企業活動の悪辣さが描かれていた。

企業はポスト産業資本主義のなかで生き残るために、商品の差異化をたえず図ろうとする。そのためには動物や人間を犠牲にすることも厭わない。というより、動物や人間を犠牲にしてまで差異化に邁進する。「人間が生きていくのに必要とは思えない化粧品などの開発で、動物を犠牲にす」べきではないという主張が効力をもたないのは、資本主義は「人間が生きていくのに必要とは思えない」消費活動によって成り立っているからだ。したがって、「人間が生きていくのに必要とは思えない化粧品」とは、「人間が生きていくのに必要とは思えない」消費活動を意味するが故に、「ただ動物実験をして新たに開発した化粧品は使わないでほしい」といくら主張したところで、「人間が生きていくのに必要とは思えない化粧品など」の購入は、人々が旺盛な消費活動を止めない以上、なくならないし、動物実験も続くのである。つまり、人々が消費者として動物たちの命を消費していくのだ。

「動物実験反対キャンペーン」などによって化粧品の開発のための動物実験が減少し、動物実験に代わる代替実験の研究が進んでいることは従前から報道されており、その代替実験としてたとえば、外部から刺激を受けたときに角膜と同じような反応をするソラマメから抽出したたんぱくや、人間の皮膚と同じような反応をするカボチャの皮から作った物質を用いて、目や肌への刺激度を調べる方法やヒト細胞を使う方法などがよく知られている。

「動物実験を肩代わりする検査用チップ」（『Forbes / US』05. 12）もまた登場して、《生体組織を“再現”するチップの登場で製薬業界は、新薬開発コストを削減し、何百万もの動物の犠牲を減らせるかもしれない》可能性を垣間見せている。カリフォルニア州ビバリーヒルズにあるヒューレル社が開発した「ヒューレル」は、《シリコンでできたマイクロチップのウエハー（集積回路の基板となる薄板）のようなものである。いくつかの部屋に分けられたウエハーの上には、動物から直接抽出したり、もしくは実験室で培養した臓器の細胞が並べられる。／外部に取り付けたポンプが検査物質の分子を狭

い経路でつながるヒューレルの小部屋に順番に流していく。すると、ヒューレルが動物の複雑な生理機能を模倣して再現するしくみだという。／新薬の候補物質を注入して数時間のうちに、その分子の毒性や効果の有無が判定できる。これにより、製薬会社は細胞レベルの検査から時間とコストのかかる動物実験へ進むのを事前に防ぐことができるのだ。》

記事によると、《一つの新薬がFDA（食品医薬品局）の承認取得に至るまでには、平均880億円の費用と14年の歳月がかかる。またそのために、年間3000万匹に及ぶウサギやマウスなどの動物が犠牲になっている》とされ、ヒューレルの共同開発社のバクスターとシューラーは、《どのように無害の物質が身体の中で有害になるかを動物の身体そのものをいっさい用いずに証明したのだ。その後2人は、筋弛緩剤のダントロレンと抗ガン剤のテガフルを含む15の化合物を用いて自分たちの考えを証明することに成功した》。「動物の倫理的扱いを求める会」の幹部は、「これらの技術は、残酷で粗野な動物実験を”真の科学”に変える」と賞賛する。

「動物実験を考える」シリーズ④（04.11.3付朝日）では、茨城県つくば市にある国立感染症研究所・筑波医学実験用霊長類センターで飼育されている約2千匹のカニクイザルが取り上げられている。「人間に危険なBウイルスに半数以上が感染している野生と異なって、ここでのカニクイザルは《特定の病原体がないSPF動物》で、《飼育室は通路を挟んで左右に2段ずつ個別ゲージが並んでいる。繁殖や飼育管理のためとはいえ、集団性のサルにとって異質な環境ではある。／カニクイザルは78～81年に計600匹を輸入し、繁殖させてきた。人間とサルしか感染しない小児まひなどの生ワクチンの国家検定に使うためだ。現在もワクチン検定に年間150匹使うほか、家族性高脂血症や糖尿病の疾患モデルがいる。三十数匹いる高齢ザル群の最高齢は36歳、人間なら100歳以上だ。／97年から、研究者に共同利用施設を開放し、遺伝子治療、再生医療の開発も支援する。》

日本大学医学部の片山容一教授（脳神経外科）が紹介したビデオに映しだされた、ジストニーという難病に冒されている少年は、《体幹や手足の筋肉が勝手に不規則に動き出す》が、《片山教授らの手術で脳内に埋め込んだ微小電極から、刺激を与えると、少年は何事もなかったかのように普通に歩いた。／脳損傷の後遺症は、神経回路の欠損で治らないとされるが、定位・機能神経外科では「神経ネットワークの機能失調だからバランスを取り戻せば治る」とみる。（中略）パーキンソン病などの不随意運動で行った手術は約250例にのぼる。／それを支えるのが、ニホンザルを使った脳神経系の膨大な研究成果だ。》しかし、《脳内に埋めた電極で、体の震えは抑えられるが、病気そのものの進行は止められない》として、「まだまだ議題だらけ。薄氷を踏む思いです。動物実験なしに臨床医学は成り立ちません」という言葉で結ばれているが、研究者の視線が臨床医学の進歩にのみ注がれている姿を記事はむしろ浮かび上がらせている。

2007年4月13日記

